

『古代アメリカ』3,2000,pp. 1-26

<論 文>

## 太陽と月の神話

### — 古典期マヤの神話理解に向けての予備的考察 —

杓谷茂樹

(総合研究大学院大学)

#### 【要旨】

現在のマヤ地域の先住民諸社会では、今日に至るまで様々な神話が保持されてきたことが知られているが、その中で現存する最古の神話は『ポボル・ヴフ』という16世紀に記録されたキチエの神話である。よって先スペイン期にどのような神話が語り継がれていたのかについては、土器や絵文書などに描かれた図像や文字情報を通して断片的に推し量るよりない。筆者は特に古典期に語り継がれていた神話を理解するために、現存する後世の神話を利用し、これらとの比較、検討をすることによってこれを指すが、その際現代に至るまで長い時間をかけて神話が語り継がれてきたということについて考える必要が出てくる。そこで、まず小論では、『ポボル・ヴフ』の双子の英雄神にかかる部分を太陽と月の神話として読み、これと現在モパンの人々によって語り継がれている太陽と月の神話とを比較するという作業を通して、神話を語り継ぐということについて考察している。そして、今後、土器などに描かれている古典期マヤの神話を理解しようとするにあたって、こういった後世の神話を利用することが有効であることを明らかにした上で、我々はどういったかたちの理解を目指してゆくべきなのかについて論じている。

#### 【キーワード】

マヤ、太陽と月の神話、モパン、『ポボル・ヴフ』、神話を語り継ぐ

#### 【目次】

1. はじめに
2. 先スペイン期マヤの神話
3. 太陽と月の神話
4. モパンの太陽と月の神話と『ポボル・ヴフ』
  - 1) 新しい太陽が創造される理由
  - 2) 兄弟と祖母の戦い
  - 3) 太陽と月の出会い
  - 4) 月の死と再生
  - 5) 月が家出し、太陽が連れ戻す話
  - 6) 太陽、月、金星が空に昇る話
5. 神話を語り継ぐことの動態と静態
6. 古典期マヤの神話理解に向けて

## 7. 最後に

## APPENDIX サンアントニオの民話：太陽と月と金星の伝説（要約）

## 1. はじめに

レヴィ=ストロースの神話研究をあげるまでもなく、南北アメリカ大陸は神話の豊富に存在する地域である。本研究の対象となるマヤ地域はこの両大陸の中でも古くより非常に高度な文明を誇ってきたメソアメリカの一端にあり、16世紀にスペイン人によって征服されるまで高度に発達した社会、豊かな文化、そして複雑な宗教体系を持って繁栄してきたことについて、ここであらためて述べる必要はないであろう。そして、現在のマヤ地域の先住民諸社会は、メソアメリカの他地域と同様に、今日に至るまでさまざまな神話を保持してきたことが知られている。

これまで多くの考古学者たちによって、このマヤ地域でおこなわれてきた発掘調査は、先スペイン期のマヤの人々の社会や生活を、後世に生きる我々にかいま見せてくれた。しかし、こういった知識の中で、彼らが自分たちをとりまく世界、あるいは宇宙をどのように見て、どのようなことを感じ、何を心のよりどころにしていたのかといったことに関しては、情報が少ないこともあり、完全に理解することはまだまだ難しいように思われる。特に神話は、それを持っていた人々の宗教観や世界観をよく表現しているものであるにもかかわらず、古代マヤ研究の現状は、常に『ポ波尔・ヴフ (Popol Vuh)』<sup>1)</sup> というひとつの神話を参照せざるを得ず、それを越えた先スペイン期の神話に関する議論が進展する段階には至っていないといえる [cf. Taube 1993: 27-30]。

『ポ波尔・ヴフ』は、現在もグアテマラ高地に住むキチュエの人々の間に伝わっていた神話を、16世紀に記録したものとわれ、現存するマヤ地域の神話としては最古のものであるといっている。この『ポ波尔・ヴフ』は、後古典期のキチュエの人々に関する知識を豊富に我々に与えてくれただけでなく、さらに古典期まで時間をさかのぼって、当時のマヤの人々の宗教観や世界観を理解するための手がかりも与えてくれた [cf. Coe 1973: 12-14]。しかし、古典期の神話の理解ということとなると、マヤ地域には『ポ波尔・ヴフ』には書かれていない様々な神話上のエピソードも存在していたと考えられ、キチュエという一地方の神話である『ポ波尔・ヴフ』だけを手がかりにして、古典期マヤの神話を考えてゆこうとしても、明らかに限界があるといえよう。

そこで、小論では太陽と月の神話というマヤ地域で広く語られている神話のトピックを取り上げて、神話を語り継ぐということに関して考察をおこなう。そして、『ポ波尔・ヴフ』以外の神話、すなわち16世紀以降にメソアメリカ地域で語り継がれてきた神話に、先スペイン期、特に古典期マヤの神話理解に向けての手がかりを求めることが可能であることを明らかにし、さらにその場合、我々はどういったかたちの理解を目指してゆくべきであるのかについて考えてゆきたい。

## 2. 先スペイン期マヤの神話

まず、本研究が対象とする神話とは何なのであろうか。神話の定義については宗教学や文化人類学、そして神話学といった様々な分野で長く議論がおこなわれてきており、いまだ決定的なものはない [cf. 松村 1999: 7-14]。神話が口頭伝承のひとつのジャンルという位置づけにあることに議論の余地はないであろうが、『文化人類学事典』（弘文堂）には「神話は特定の社会において、人々によって真実と受けとめられている話であり、神話の中に語られる出来事によって、現実の様々な事

象の存在の根拠が示され、基礎づけられる。(中略)多くの社会において、神話は聖性を帯びたものとして、特別な範疇をなしている。神話の出来事の起こったときは、単なる過去の一点ではなく、今日ある事物や秩序を基礎づける「始原」あるいは「原古」の時であり、歴史的時間を超えて実在するときである。その物語の舞台も、現存の形以前の世界や、天界・地下などの他界であり、行為者も、神々や祖先・英雄などの半神的存在、時に動物であり、神話の中の固有名詞の多くは、信仰や社会生活に関わる指示内容を持つ」と説明されている[田村 1987: 392-393]。本研究においても、一応この説明に従って神話というものを理解することとし、その「現実の様々な事象の存在の根拠」を示し、「基礎づけ」の機能を重視して、それを持つ人々の宇宙観、あるいは宗教観に今後アプローチしてゆくにあたっての重要な道しるべとして、神話を位置づけてゆきたい。

そこで、まずメソアメリカ全体を見渡してみると、アステカ文化を担ったナワのものを中心とした神話が現在まで数多く残されている。これらは先スペイン期にナワ人たちによって語り伝えられてきたものを、征服以降にスペイン人修道士やアルファベットを習得した先住民が記録するという形で残されたもので、中でも『絵によるメキシコの歴史 (*Historia de los mexicanos por sus pinturas*)』、『メキシコの歴史 (*Histoyre du Mechique*)』、『太陽の伝説 (*Legenda de los soles*)』などが有名である。また、アステカの人々の生活を克明に記したベルナルディーノ・デ・サアグンの『ヌエバ・エスパーニャ史綜覧 (*Historia general de las cosas de Nueva España*)』には主要な神々にまつわる重要な神話や太陽の創造に関する神話などが記述されており、このほかにも数多くの絵文書や年代記などを利用することによって、ここ100年以上の間にナワの神話の研究は様々な成果を上げてきた[Taube 1993: 27-30]。

しかし一方で目をマヤ地域に向けると、古典期の多彩色土器などに描かれた場面や後古典期の絵文書から、先スペイン期に神話の様々なエピソードが存在していたことは確実なものとして断言できるものの、この先スペイン期の神話の特徴をよく残したものとしてひとつのまとまったストーリーを知ることができるものは、ほぼ唯一『ポボル・ヴフ』だけであるといえる。他に強いてあげるとするならば、有名なチュマイエル、ティシミン、マニをはじめとしてユカタン半島の各地に残されていた『チラム・バラムの書 (*Libro de Chilam Balam*)』などごく一部の資料に、洪水による世界の破壊とその後の再生に関する若干の神話的記述がみとめられるくらいであろう[Roys 1967: 31-34, 98-107, Makemson 1951: 208-210, etc.]。

上記の状況をふまえ、今日我々が先スペイン期のマヤの神話を理解してゆこうとするときに、有効なアプローチとなると考えられるのは、現存する後世の神話を利用し、これらとの比較、検討によってその理解を目指すというものであるといえる。またこの他にも、土器や絵文書の神話場面に書かれている文字を読むことによって、そこに何が描かれているのかを知ろうとする直接的なアプローチも考えられるが、これにはマヤ文字の解読という現在も急速に進展しつつある研究が不可欠であり、現在のところ筆者の能力を超えているので、小論では今後の課題としてあえて触れずにおくこととしたい。

先に述べてきたように、メソアメリカでは植民地期から現在に至るまで、各地で神話が語り継がれてきた。現代のマヤの資料にすでに残っていない神話の要素が、メソアメリカの他の地域に残っているという可能性も強く、本研究のように、先スペイン期マヤの神話を対象とする場合でも、広くメソアメリカ全体の神話に目を配ってゆく必要がある。実際、これまでも土器などに描かれた先スペイン期のマヤの神話の場面を理解しようとするときには、豊富なアステカの神話を参照して、これと比較することによって解釈をおこなうという作業がおこなわれてきた。そして、これによ

て大きな成果が上がってきたことは紛れもない事実である[cf. 八杉 1994: 466-467]。しかし、どのような資料を扱おうと、先スペイン期の図像と後世の神話の比較検討には、理解のためのモデルとなる後世の神話のある程度のバラエティーが必要となり、また先スペイン期と現在との間に深い時間の溝が存在することを考慮する必要がある。

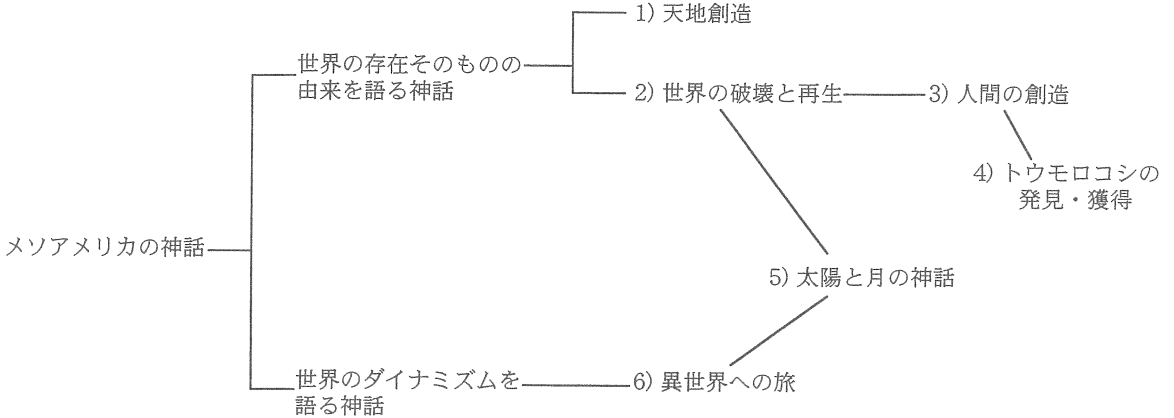
そこで小論では、メソアメリカ各地の神話を網羅的に考察することについては次の課題として残し、まずは古典期に存在していた神話を理解するための第一歩として、これまでに現代のマヤ社会などで収集されてきた神話と16世紀に書かれた『ポポル・ヴフ』とを合わせて検討することで、スペイン人が入ってくる前の時代のマヤの神話にはどのような要素が存在していたのかについて考えてみたい。紙面の都合上もあり、対象とするテーマを太陽と月にまつわる神話に絞ることとするが、現代の神話を先スペイン期の神話の特徴をよく残した『ポポル・ヴフ』と比較、検討してゆくことにより、現代の神話のいくつかの要素が先スペイン期にも存在したことを明らかにすることができれば、『ポポル・ヴフ』に描かれていないエピソードとして、どのようなものがあつたかを想定できる可能性が広がるだけでなく、先スペイン期と現在との間に存在する深い時間の溝を、ある程度埋めることができたということができらるであろう<sup>2)</sup>。

また、上記の作業によって、この溝を埋めることができたとすれば、今度はもう一方に存在する古典期から征服期までの時間の溝を埋めてゆく必要があるが、これについては、今後広くメソアメリカ各地の神話を比較、検討し、さらに後古典期の絵文書などに書かれた図像をふまえながら、古典期の図像にみられる神話場面と照らし合わせてゆく作業の中で、埋めてゆくことができると考えている。

それでは、まずはマヤのものを中心に現代のメソアメリカに生き続けている神話を概観してみることとしたい。マヤ地域で生きた神話が本格的に収集されるようになったのは、アメリカ人類学を中心としてF. ボアズの影響が強かった今世紀前半からで、若かりし頃のJ. E. S. トンプソンによるモパンの調査もこの時期におこなわれている。その後現在に至るまで、ハーバード大学を中心に1957年から64年にかけておこなわれたハーバード・チアパス・プロジェクト、および夏期言語学研究所 (Summer Institute of Linguistics) などによる精力的な収集活動をはじめとして、多くの人類学者等によって各地の神話の収集がおこなわれてきた。これらによって、今日我々は、北はユカタン地方から南はチアパスやグアテマラの高地に至るまで、マヤ地域全域にわたって現代マヤの神話に関する知識を有するに至ったのである。

メソアメリカの神話には主に1) 天地の創造に関する神話、2) 世界の破壊と再生の神話、3) トウモロコシの発見、獲得に関する神話、4) 人間の創造の神話、5) 太陽と月の神話、6) 異世界への旅の神話などの主題を見いだすことができる (第1図) [cf. Bierhorst 1990]。例えば『ポポル・ヴフ』にも、これらのテーマは全て含まれており、これが無名の作者によって書かれた16世紀やヒメネス神父によって書き写された18世紀の時点でキリスト教的な世界観が若干入りこむことが仮にあつたとしても、先スペイン期のマヤにこういった主題の神話が存在していたことは疑いのないところであろう。

天地の創造に関する神話と世界の破壊と再生の神話はいずれも、神話を持つ人々の住む世界、ないし宇宙がどのようにできたのかということを説明するものである。前者では『ポポル・ヴフ』の冒頭部分が思い浮かぶが、これは我々になじみの深い古事記や旧約聖書は言うに及ばず、世界中に広く存在している神話のテーマである。これに対し後者は、神が人間を創造する神話と密接な関係を持っている。これは、現在の世界ができる前に3つ、ないし4つの世界とそれぞれの世界の人間が創造されては滅ぼされる過程を描いたもので、メソアメリカの創造神話の特徴をよく表したもので



第1図 メソアメリカ神話の主な主題

あるといえる。そして多くの場合、この世界の破壊の際に洪水が重要な役割を果たすことも特徴的である。この神話は時間とともに歴史は繰り返すという発想と結びつき、それは、例えば、彼らの260日周期で循環する暦などの形で表現されていると考えられる。このことは、言い換えれば、マヤを含む古代メソアメリカの人々は常に神話的時間の中で生きていたことを意味しているのかもしれない。

次に、トウモロコシの発見、獲得に関する神話は、神によって与えられた主食としてのトウモロコシの重要性を確認する重要なテーマである。そこでは、山や岩の下に隠されているトウモロコシをアリやハチなどの虫や、ネズミなどの小動物が協力するかたちで見つけだすというものが多いが、他にも、山に雷が落ちて中に隠されていたトウモロコシが発見されるというものなど様々なヴァリエーションがある[Thompson 1930: 132-134; Montejo and Campbell 1993: 103-108, etc.]. 『ポポル・ヴフ』では、神が人間に食料を与えたというだけでなく、現在の人間を創造するときにトウモロコシを見つけたし、これを新しく創る人間の肉として使うという形にして、この主題を世界の破壊と再生の神話の中に位置づけられた人間の創造の神話に組み込んでいる[Recinos, Goetz and Morley 1950: 165-167; Tedlock 1985: 163-164]. このように、世界の創造に関する神話には、人間の創造やトウモロコシの発見、獲得を描いた神話が結びつきやすい近い関係にあるといえるが、これらは神話を持つ人々が生きている世界の存在そのものの由来を語る神話であるといえることができる。

一方、異世界への旅に関する神話は、いわゆる英雄神話と呼ばれるものと重なる部分が多いと考えられるが、これは神によって創造された現在の世界、あるいは宇宙というものの存在を前提としてストーリーが進行してゆくものである。この主題では『ポポル・ヴフ』におけるフンアフプー(Hunahpu)とイシュバランケー(Xbalanqué)の双子の英雄によるシバルバと呼ばれる冥界への旅の話があまりにも有名であるが、他にも男が猛禽類の鳥に変身する話や、死んだ妻を生き返らせるために冥界に妻を捜しに行く夫の話、人間が動物の王のもとに行く話、男が天に連れ去られて雷神の手伝いをする話などがみられる[Bierhorst 1990: 116-124]. この主題はその神話を持つ人々の住む世界や宇宙の仕組みを説明するもので、その中でも特に冥界への旅を描いたものは、次に述べる太陽

と月の神話と結びついたとき、世界のダイナミズムを語る神話として儀礼や暦と密接な関係を持つようになる。

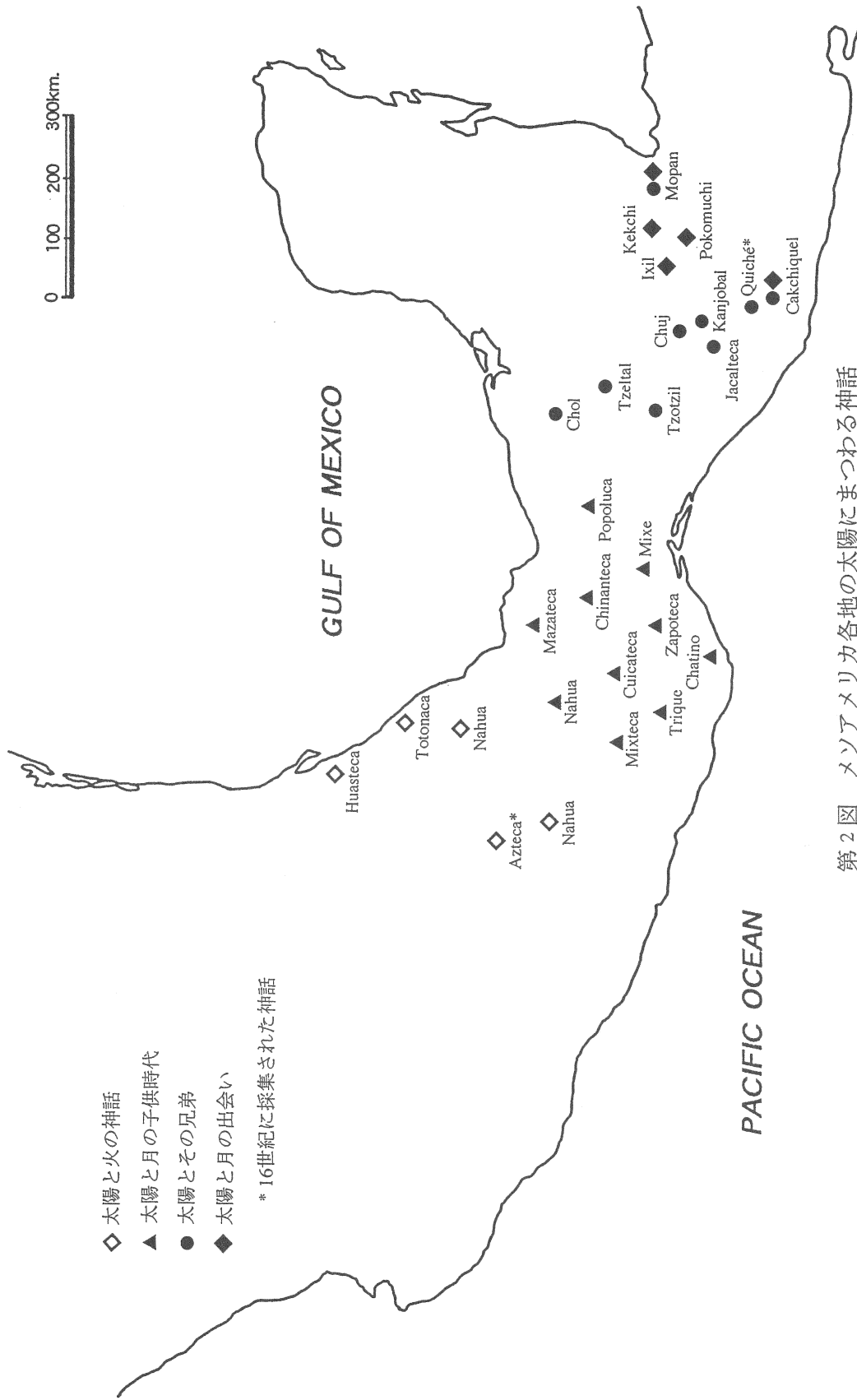
こう見てくると、マヤの神話には現在の世界の由来を語り伝えたものと、現在の世界の仕組みやダイナミズムを説明するものがあることがわかる<sup>3)</sup>。そこで、太陽と月の神話について考えると、太陽は、月や金星などその他の星とともに、神によって現在の世界が創造され、次に人間が作られた後に初めて空に昇るのであって、世界の由来を語る一連の流れを完了させる位置に置かれているといえる。しかし一方で、その主題の中で語られる太陽や月の生活は世界のダイナミズムを象徴的に説明するものともなり得る。そういった意味で、この二つの神話グループの間において、太陽と月の神話はこの両方の性格を持ち得る主題であるといえるかもしれない。すなわち、この主題の中には、現在の世界の由来を語るようなエピソードと、その世界の仕組みやダイナミズムを説明するようなエピソードのいずれもが入り得るのである。ただし、マヤ神話の場合、神によって創造され滅ぼされてゆく各時代に、その時代ごとの太陽が存在しているナワの神話などの場合と異なり、太陽の出現が現在の世界におけるエピソードとしてだけ描かれる傾向にあるとすれば、それは後者の性格の方がより強いということを表しているといえよう。

### 3. 太陽と月の神話

太陽にまつわる神話はメソアメリカ各地に広く分布している。J. バイヤーホーストがまとめたところによると、この種の神話にはいくつかの種類があり、地域ごとに比較的きれいに分類できる(第2図)。例えばメキシコ中央高原のナワやオトミなどでは少年が火に飛び込んで太陽になるエピソード(この場合、月は少年の母親であることが多い)が、ミシュテカ、サポテカ、ミヘなどの中間地帯では兄妹である子どもが太陽と月になる話が多く見られる。そしてマヤでは太陽になる者とその兄弟の活躍の話と、太陽が月と出会うエピソードが存在している[Bierhorst 1990: 100-115]。すなわちマヤ地域においては、太陽にまつわる神話とは、現在の太陽や月、金星などの天体が空に昇る前の時代に、それぞれが人格(あるいは神格)を持ち、それらが地上で繰り広げる様々なエピソードを指すということができ、小論ではこれを「太陽と月の神話」と呼ぶことにする。

『ポポル・ヴフ』の第2部<sup>4)</sup>は、一般にフニアフブーとイシュバランケーという双子の英雄がシバルバと呼ばれる冥界に行って地下世界の神に勝利する話としてよく知られているが、その勝利の後、兄弟は太陽と月になって空に上ってゆくことから考えて、小論でいう太陽と月の神話の範疇に入るものとして他の神話と比較することができる。ただし、『ポポル・ヴフ』の場合、兄弟のうち一人が太陽に、もう一人が月になったことになっているもの[Recinos, Goetz and Morley 1950: 163-164; Tedlock 1985: 159-160]、マヤの神話では二人兄弟の兄が金星、弟が太陽、そしてこの弟の太陽の妻が月であるという図式が一般的である。トンプソンは『ポポル・ヴフ』においてともに男性である双子の兄弟が太陽と月になっているのは、おそらく非マヤ地域からの影響のためであろうと述べているが[Thompson 1970: 368-369]、彼自身、現在のキチエの神話では月は太陽の妻とされていることを認めており、かつマヤでもアステカでも、先スペイン期に月を司る神が女神であったことを考慮しても、『ポポル・ヴフ』のケースは外部の影響というよりも、語り継がれてくる過程で、何らかの理由で変化してしまったものと考えた方が合理的であると思われる。また、次に詳しく述べるサン・アントニオの民話にでてくる話では、太陽とその兄弟のエピソードとともに、太陽と月が出会って結婚するという2つのエピソードが一緒になって語られている。

そこで以下では、一つのテストケースとして、現代の太陽と月の神話の一例としてモパンの人々



- ◇ 太陽と火の神話
- ▲ 太陽と月の子供時代
- 太陽とその兄弟
- ◆ 太陽と月の出会い

\* 16世紀に採集された神話

第2図 メソアメリカ各地の太陽にまつわる神話

(J. Bierhorst 1990, p.103をもとに作成)

の中で語り継がれる民話をあげる。そして、さらに先スペイン期の神話の特徴をよく残すとされる『ポボル・ヴフ』の双子の英雄にかかる部分を太陽と月の神話として読むことにより、このモパンの神話と比較することで話を進めてゆきたい。

#### 4. モパンの太陽と月の神話と『ポボル・ヴフ』

サン・アントニオの『太陽と月と金星の伝説』（APPENDIX参照）は、大英博物館により派遣された英領ホンジュラス（現ベリーズ）のルバアントゥン遺跡などでの考古学調査の際に、J. E. S. トンプソンが、1927年と、1928年から翌29年にかけての2度、現在のベリーズ南部に位置し、モパンの人々の住むサン・アントニオという村において民族学調査をした結果、採集された伝承である〔Thompson 1930: 119-135〕。彼によれば、この伝承は4人のインフォーマントからそれぞれ聞いた話をまとめたものであるということであるが、この4人はいずれも何らかの形でケクチの血を引いているということである。トンプソンはこの神話が元々ケクチからもたらされたものである可能性を考慮しながらも、調査当時にはサン・アントニオですべての村人に語り継がれていた現状から、これをモパンのものとして扱っている〔Ibid.: 135-136〕。また、彼はこれをサン・アントニオの民話（Folklore）と呼んでいるが、その内容は先に述べた神話の定義に合致しているため、小論では神話に属するものとして扱うこととする。

このモパンの神話では、大きく分けて1) 新しい太陽が創造される理由、2) 兄弟と祖母の戦い、3) 太陽と月の出会い、4) 月の死と再生、5) 月が家出し、太陽が連れ戻す話、6) 太陽、月、金星が空に昇る話、という構成でストーリーが展開する。また、これらのトピックの間には、この全体のストーリーの流れとは直接関係しない形で、いくつかの細かいエピソードが挿入されている。以下では、『ポボル・ヴフ』と比較をしながら、このモパンの太陽と月の神話のストーリーを簡単に追うことで、マヤ神話として古代から現在にいたるまで多くの要素が保持されていることを明らかにしたい（第1表）。

##### 1) 新しい太陽が創造される理由

ここでは、新しい太陽が創造される理由とともに、この神話の主人公のキン（Lord Kin）<sup>5)</sup>とその兄弟の紹介がなされる。キンが太陽になる前に太陽であったのは、アダムとイブの息子のひとりであったが、洪水を起こして多くの人々を死なせるという不祥事を起こしてしまい、代わりに3人兄弟の次男であったキンが次の太陽としてアダムに指名を受けるというエピソードである。

このトピックは太陽の交代という、神話全体を通して語られる、ひとつのテーマの序章であるといえる。一方、『ポボル・ヴフ』においては、双子の英雄の怪鳥ヴクブ・カキシユ（Vucub-Caquix）退治がこれにあたる。そこでは、まだ空に太陽が昇る前の時代に、この怪鳥は自ら太陽であることを称しており、このことはニセの太陽が存在していたことを意味している〔de la Garza 1987: 27-29〕。そして、このニセの太陽を双子の英雄が退治するというこのエピソードは、この二人の主人公が太陽と月になってゆくというストーリーの中で、モパンの神話におけるこの部分と同じ位置づけにあるといえる。ここで、アダムとイブの息子が洪水を起こしてしまうということと、ヴクブ・カキシユが野心を持ち、かつ傲慢であることは、この両者が絶対的な存在の意向に反する存在であることを示すという点で一致する。

なお、ここで出てくるアダムとイブは、言うまでもなくキリスト教の強い影響を受けた結果登場



第1表 モパンの『太陽と月と金星の伝説』と『ポポル・ヴフ』の比較

モパン

『ポポル・ヴフ』

<p>1) 新しい太陽が創られる理由。 古い太陽から新しい太陽への交代 前の太陽が洪水を起こす ←絶対的存在の意向に反する存在→</p>	<p>・怪物退治 ニセの太陽を倒し、真の太陽が昇る ニセの太陽(ヴクブ・カキシユ)の野心と傲慢</p>
<p>2) 兄弟と祖母の戦い。 兄弟の勝利 両親を亡くし祖母に育てられるという異常性 ・太陽と母の再会と別れ→太陽の異常な出生 祖母の殺害をめぐる兄弟間の対立→未っ子を猿に変える 旅立ち</p>	<p>・双子と祖母、異母兄弟との対立 ←戦いにカンテナーの木が使われる→ 双子の勝利 双子の出生と生い立ちの異常性 異母兄との対立→異母兄を猿に変える シバルバへの旅立ち</p>
<p>3) 太陽と月の出会い。 キン(太陽)とシュクタクタニ(月) vs タクタニ シュクタクタニはタクタニ(祖父)の孫娘 タクタニがキンを試す→キンの嘘を見破る タクタニが太陽と月を殺そうとする ←二人は知恵を使って対抗する→</p>	<p>・シバルバ 双子 vs シバルバの主 双子の母(イシユキツク)はシバルバの娘 シバルバの主が双子を試す→シバルバの主が欺き、双子が 見破る シバルバの主が双子を殺そうとする</p>
<p>4) 月の死と再生。 雷にうたれて死ぬ 川に沈む 1 3 日後に再生 ←再生の場としての川→</p>	<p>火に飛び込んで自ら死ぬ 川に沈められる 5 日後に再生</p>
<p>5) 月が鳥の町に行き、太陽が連れ戻す。 大鳥の主 --- 絶対的な力 呪術により(作画的に)歯痛を起こす →治療するために近づき妻を見つけ出す =目的を果たす</p>	<p>・怪物退治 怪鳥ヴクブ・カキシユ --- 絶対的な力 吹き矢を使い(作画的に)歯痛を起こす →治療するために近づき倒す =目的を果たす</p>
<p>6) 太陽、月、金星空に上る。 空の太陽と月は空に置いた鏡に映ったもの 月の片目をとることのできる光を滅らす 太陽：月=明：暗</p>	<p>・双子は太陽と月になる 見えている太陽は空に映ったもの 最初の人間が近くのものしか見えないようにする 神：人間=見える：見えない</p>

した名前であるが、おそらくこの役回りは元来マヤの最高神とその妻がいた場所であったはずであることは間違いない<sup>6)</sup>。

## 2) 兄弟と祖母の戦い

ここからがこの神話の本文といえよう。これはシュキツァ (Xkitza) という老女によって育てられた3兄弟は、自分たちの狩りの獲物をシュキツァが愛人である怪物に全て与えていたことに怒り、この怪物を殺してしまう。そして、これに怒ったシュキツァが兄弟を殺そうとして両者は争い、ナゾ掛けの勝負の結果兄弟が勝利するというエピソードである。

このトピックの基本的な図式は兄弟と老女の対立と兄弟の勝利であるが、これは『ポボル・ヴフ』のフンアフプーとシュバランケの双子の兄弟とその祖母、そして異母兄弟との対立とこれらへの勝利と対照される。この二つのトピックではいずれも戦いの際に勝利することになる兄弟の側がカンテーと呼ばれる木を利用していることなどにも共通点が見い出される。

また、3兄弟が親を亡くしてシュキツァによって育てられている(親によって育てられない)という異常性は、後に出てくるキンの母親との再会(こういった矛盾をはらんでいることも神話の特徴である)と別れの場面で紹介される、結婚していない男女の子供であるというキンの出生に関する異常性とあわせて、『ポボル・ヴフ』に見られる双子の生い立ちの異常性に合致する。

そして、この兄弟が老女を殺してしまうことを相談した際に、三男のトゥップ (T'up) だけがこれに反対したため、二人の兄によって猿にかえられてしまい、それが猿の起源となったというエピソードは、このモパンの例では二人の兄が末弟を猿に変えるのに対して、『ポボル・ヴフ』では年少の双子の英雄が異母兄を猿に変えているという違いはあるものの、対立する兄弟を猿に変えるという図式において、まさに『ポボル・ヴフ』で双子の英雄がフンバツツ (Hun Batz) とフンチョウエン (Hun Chuen) を猿に変えてしまうくぐりどりと全く同じである。

なお、このエピソードの後に、シュキツァの代わりに兄弟に食事を作る女性が必要ということで、長男のシュラブ (Lord Xulab) がいやいや結婚するが、結局失敗するというエピソードが語られる。そこでは後に金星になるというこのシュラブがすべての動物を囲いのなかに飼っていること、そして全ての動物の守り神としての性格が明らかにされる。シュラブの結婚の失敗は、彼の醜い顔を妻が見て笑ってしまい、このことにシュラブが驚いたときに囲いの中の動物がすべて逃げしまったことによる。その過程でシカやウサギの尾が短い理由や、食べられる植物の起源などの細かいエピソードが挿入されているが、これらも『ポボル・ヴフ』に類似したエピソードを見ることができる。また、この出来事により怒ったシュラブは家を出てゆくのであるが、これに続く部分の冒頭でキンがすでに旅に出ていることも語られ、ここでは旅立ちが一つのテーマとなっていることがわかる。これは『ポボル・ヴフ』における双子の英雄のシバルバへの旅立ちに比定できるものと考えられる。

## 3) 太陽と月の出会い

このトピックに含まれるのは、キンがシュタクタニ (X'tactani) という、後に月になる少女を見初め、少女の祖父のタクタニ (T'actani) の妨害を受けながらも夫婦となり、タクタニのもとから逃げるが、この二人をタクタニが殺そうとするというエピソードである。

一見して全く異なる話のように思われるものの、このモパンの神話に描かれている太陽と月の出会いのトピックには、これに続く月の死と再生のトピックと合わせて、『ポボル・ヴフ』における

双子の英雄のシバルバでの活躍のトピックと共通する要素をいくつか見ることができる。

このトピックの基本的な図式はキンとシュタクタニに対するタクタニという対立関係である。これは『ポボル・ヴフ』における双子の英雄対シバルバの主という関係に相当する。そして、ここで見られるシュタクタニがタクタニの孫娘であるという関係と、『ポボル・ヴフ』の双子の英雄の母親であるイシュキック (Xquic) がシバルバの娘であったということは、両方の神話において主人公の兄弟に最も近い関係にある女性が、彼らに対立する場所の出身であったという共通点を示している。

キンはシュタクタニの気を引くために、実際には獲物が捕れていないのに、シカの皮に詰め物をしていかにもシカが捕れたかのように欺き、自分がいい狩人であるように見せた。これを見たシュタクタニがキンを認めて結婚してもいいと思うようになったとき、タクタニはキンを試してその嘘を見破ってしまう。ここに見られる対立関係の中で、一方が欺き、他方がこれを見破るという図式は、『ポボル・ヴフ』では双子の英雄がシバルバに入ってきたときにシバルバの主が彼らを欺こうとして、双子がこれを見破ってしまう箇所に見られるが、これら2つの神話の間で欺く側と見破る側の立場が逆転しているのは、神話というものについて考えてゆくうえで興味深い点である。

キンとシュタクタニはタクタニのもとから逃げることにするが、キンはすぐにタクタニに見つけられて、連れ戻されてしまわないように、あらかじめタクタニの持っている世界中で起こっているすべてのことを見通すことができるという魔法の石の表面を煤で覆い、どれだけ離れていようとも命中させることのできるという魔法の吹き矢に粉にした唐辛子を詰めて口のところをふさいでおいた。その上でカヌーで川を逃げたのである。このことは相手の絶対的な能力に対して知恵を用いて対抗したことを述べており、それは『ポボル・ヴフ』でシバルバの主がフンアフプーとイシュバラケンケに課したいくつもの試練を、この双子の英雄が知恵を使って切り抜けるところに共通する要素であるといえる。

#### 4) 月の死と再生

このトピックは、その前の太陽と月の出会いのトピックと連続するものであるが、駆け落ちをした二人に対立する役が、ここではタクタニからその叔父の稲妻の神チャク (Chac) にバトンタッチする。チャクが近づいてきたことに気づいた二人は、キンが亀に、シュタクタニは蟹に変身して川の中に逃げる。キンは助かったものの、シュタクタニはチャクの放った稲妻にあたってバラバラになって死んでしまう。キンはシュタクタニの残骸を13の器に入れてその場を立ち去り、彼が再び戻ってきた13日後にシュタクタニは生き返るのである。

ここで、シュタクタニが雷に打たれて死んだこと、およびキ金が姿を隠したことは、『ポボル・ヴフ』で双子の英雄がシバルバの主が課したいくつもの責苦を切り抜けた後、自ら焚火に身を投じて死ぬことに比定できる。そして、どちらの神話においてもモパンの場合は13日後に、『ポボル・ヴフ』の場合は5日後に死んだ者が生き返り、主人公の二人はそれぞれもとの状態に復帰するのである。また、ここでチャクが二人を殺そうとしたことと、双子の英雄が自ら死んだことは、それまでの対立の図式の中で、タクタニ、そしてシバルバの主が直接彼らに手をかけていないという点において一致していると考えられることもできよう。

また、キンとシュタクタニが稲妻の攻撃を受けて川に沈んだということと、『ポボル・ヴフ』の双子が自ら焚火に身を投じて死んだ後に、シバルバの主がその灰を川に沈めたということは、川が再生の舞台となったという点で共通する要素であるといえる。

### 5) 月が家出し、太陽が連れ戻す話

シュタクタニが生き返った後、キンと彼女は新たに家を建てて暮らすようになるが、兄のシュラブもまた彼らと生活を共にする。この生活の中でキンは兄と妻が関係を持っているのではと考え、嫉妬から彼らに嫌がらせをする。このような短いエピソードがつなぎとして入った後、この月が家出し、太陽が連れ戻すというトピックへと話は展開してゆく。

ここで、シュタクタニが家出をするということは、それまでの生活から、新しい生活に移行することであり、それは再生を意味しているといえる。このことは、先ほどのキンが実母に捨てられ、シュキツァに拾われるエピソード、そしてシュタクタニがキンとともにタクタニのもとから逃げたエピソードにも言えることであるが、その再生の舞台となったのが、やはり、川や川岸であったことは注目に値する。

シュタクタニは家出をして、ワシに連れられて大鳥の主が支配するワシの国にゆき、大鳥の主とともに暮らすようになる。キンは倒れたシカのふりをして妻を連れ去ったワシを誘い出して、これを捕まえ、妻のいるワシの国まで自分を連れて行かせる。そして、彼は大鳥の主に会うために7つの赤いトウモロコシと太鼓と笛を使って、大鳥の主に歯痛を起こさせる。キンはその治療と称して大鳥の主の部屋に入り、そこで妻を見つけだして家に連れ戻す、というのがこのトピックの大まかな筋である。

このトピックは、『ポボル・ヴフ』に出てくる双子の英雄による怪鳥ヴクブ・カキシシュ退治のトピックと多くの点で共通している。まず、主人公に対立する位置にいるのが絶対的な力を持った大きな鳥であるという図式は非常に明解である。モパンの神話では、キンは大鳥の主に近づくためにトウモロコシと太鼓と笛を使った呪術により、そして、『ポボル・ヴフ』ではフンアフブがヴクブ・カキシシュの顎に吹き矢を放つことで、それぞれ作為的に敵に歯痛を起こさせている。このいずれの神話においても主人公はこの歯痛の治療と称して敵に近づき、当初の目的を果たすことに成功するのである。すなわちモパンの場合には妻を取り戻すこと、『ポボル・ヴフ』の場合にはヴクブ・カキシシュを倒すことがそれにあたる。

先に述べたキン対タクタニ、そして双子の英雄対シバルバの主という図式に見られた、主人公が圧倒的な力を持つ敵に対して知恵を使って対抗してこれをうち負かすという型は、このトピックに見られるキン対大鳥の主という図式、あるいは『ポボル・ヴフ』の双子の英雄対ヴクブ・カキシシュという図式にも見ることができる。ただし、『ポボル・ヴフ』ではヴクブ・カキシシュを退治するトピックは双子の英雄の生い立ちから始まる一連の話よりも前の部分に置かれていることは興味深い<sup>7)</sup>。

### 6) 太陽、月、金星が空に昇る話

このトピックをもって太陽と月の神話は完結する。この箇所ではキンは太陽に、シュタクタニは月に、キンの兄は明けの明星に、弟は宵の明星になったとされている。これは、この神話の最初の、シュラブが金星に、トゥプが火星か木星になるという記述と矛盾する。

太陽として空に昇ったとき、キンは空の真ん中に鏡を置き、毎朝東にある自らの家を出るとこの鏡を目指して昇り、そのまま家に引き返した。しかし鏡が彼の光を反射しているので地上からは太陽が空を旅し続けているように見えたという。これがこのトピックの中心となるストーリーである。

これに対し、『ポボル・ヴフ』では太陽が、月やその他の星とともに空に昇るくんだり、人間がトウモロコシから創造された後の話として語られ<sup>8)</sup>、その人々が待ち望む中で太陽等は空に昇るの

である。そして、その場面で：

彼（太陽）は生まれたときにただ一度姿を現しただけなので、今残っているのは彼の光が反射しているに過ぎない。人々の伝えるところによると「姿を見せている太陽は本当の太陽ではない」ということである。[Tedlock 1985: 182]

と書かれているように、モパンの神話で示された「実際に見えている太陽は、本物ではなく空（に置かれた鏡）に映った姿である」という考え方は、この古いキチエの神話にも見ることができる<sup>9)</sup>。

このエピソードの後、最初は月が太陽と同じ明るさで輝いていて、昼も夜もない状態に人々が困っていたので、太陽が月の片目を取り出すことで、この明るさを少なくしたという話が続く。同様のエピソードとしては、月となったテクシステカトル (Tecuciztecatl) が太陽と同じくらいの輝きを持っていたため、一人の神がその顔に一匹のウサギ（あるいはウサギの壺）を投げつけることでその輝きを弱めた、というナワの神話が思い浮かぶが[Anderson and Dibble 1953: 7; Bierhorst 1992: 147-149]、これに相当するような部分は『ポポル・ヴフ』には見当たらない。ただし、この太陽：月＝明：暗という関係は、『ポポル・ヴフ』で神々がトウモロコシから人間を創造した際、その最初の4人の人間が神と同じように世界中の全てのものを見通すことができることを憂慮した神々が、この人間の目を近くのものしか見えないようにしてしまったというエピソード[Recinos, Goetz and Morley 1950: 167-169; Tedlock 1985: 165-167]で表現された、神：人間＝見える：見えない、という関係と重なりを持っていると考えられる。その意味で、『ポポル・ヴフ』のこの場面で見えなくなった人間の目を、「鏡に息を吹きかけて曇らせたように」とたとえていることは示唆的である。

## 5. 神話を語り継ぐことの動態と静態

現代に属するモパンの神話と、16世紀に書かれ先スペイン期の特徴をよく残している『ポポル・ヴフ』との比較は、我々が先スペイン期に存在していた神話を理解しようとするにあたって、どういったことをしてゆかなければならないか、そしてどこまでのことができるかを教えてくれる。以下では、このことについて、古代から現代にかけて神話が語り継がれてくるということの動態面と静態面を考慮しながら考えてみたい。

前章でおこなってきた時代も地域も異なる2つの神話の比較検討の中では、両者に共通する要素に注目したため、結果として静態面の方がより強調された。そして、神話の中には、同じエピソードとして語り継がれてきたものや、いわゆる構造レベルで残ってきたものなど、『ポポル・ヴフ』の時代から現代まで変わらず受け継がれてきた様々な要素があるということが明らかにされたといえる。こういった要素を見つけだし、それを材料とすることにより、我々は古代のことを考えてゆくにあたって、現代の事物からの安易な類推に陥ることなく、確かなデータを持って臨むことができるのである。

しかし一方で、神話を語り継ぐことの動態面について考慮しなければ、神話間の時間の隔たりを越えることはできまい。筆者は前章における2つの神話の比較検討の中で、両者に共通する要素に注目したことによって、この動態面も浮き彫りにされたと考えている。このことについて考えるにあたって、まずはマヤの神話のストーリーというものがどういった構成でできあがっているかとい

うところから考えてみたい。

先にも述べたように、小論では、『ポ波尔・ヴフ』のようなひとつの「神話」としてまとめられているものの下位レベルに、小論で言うところの「主題」の存在を考えた。それは小論で扱った世界の破壊と再生の神話や太陽と月の神話のような、ひとつのテーマに基づいたストーリーの単位である。その構成は神話ごとにまちまちで、全体がひとつの「主題」によって構成されて語り継がれることもあれば、中にいくつかの「主題」が存在し、それらが融合し合うことがあったり、またある時にはそれぞれが全く独立した形で並立して構成されることもある。『ポ波尔・ヴフ』において、後の時代に行われた翻訳の中でなされた章立ては、そこに複数の「主題」が存在していることを示している。また、その双子の英雄がシバルバに行って活躍する部分には、異世界への旅の神話と太陽と月の神話という2つの主題が融合していることを、我々は容易に理解できよう。

また、小論では「主題」のさらに下位レベルには「トピック」というものを置いた。それは神話の「主題」を構成する具体的な話である。マヤの神話では複数の「トピック」が束ねられてひとつの「主題」を構成する場合他に、「主題」から独立、あるいは関連する形で、例えばサルがどうやって生み出されたのかとか、ウサギやシカの尾がなぜ短いのかといった現実の様々な事象について、それがなぜそうなのかを説明するような細かい「トピック」が織り交ぜられることもあった。この「トピック」も「主題」と同じように様々な構成形態をとる可能性がある。

さらに、例えば、前章でみたように、『ポ波尔・ヴフ』におけるヴクブ・カキシシュ退治のトピックにでてくる要素は、モパン神話では新しい太陽が昇る理由を述べたエピソードと、キンが大鳥の主の家に妻を取り返しにゆくエピソードに見いだすことができた。このように、ある神話のひとつのトピックを構成していたさらに細かい要素が、別の神話では別のトピックを構成する要素となるということもあり得るわけである。

こうみえてくると、ここまで神話の「主題」と「トピック」という構成を考えてみたが、その下位レベルにもより細かい要素（レヴィ＝ストロースの言うところの「神話素」）が存在していることがわかる。小論では、これを「エピソード」と呼んでいる。そして、こういった各レベルの要素が重層的に神話を構成しているのである<sup>14)</sup>。上記の分析からは、神話が語り継がれてゆくときには「主題」や「トピック」、そしてさらに「エピソード」が自由に選択され、順序づけられて、各々の神話が全体として再構成されてゆくことが想定される。

特定の計画性をもたずに、その都度ありあわせの材料を使って何とかすること、神話を再構成してゆく神話的思考というものを、そんなブリコラージュ（器用仕事）のようなものと表現したレヴィ＝ストロースの考えは[1976: 22-28]、まさに神話が語り継がれてゆくことの動態を的確に言い表しているのではないだろうか。その過程で、神話の複数のヴァリエーションが生まれてゆき、また同一神話の中でも現代に生きる我々の論理ではつじつまが合わず、矛盾していたり、理解しがたいことでさえ、当たり前のように語られるといったことが起こるわけである。

それでは、次に、これまでの議論をふまえて、古典期の多彩色土器などに描かれた神話場面について考えてみたい。

## 6. 古典期マヤの神話理解に向けて

古典期の多彩色土器に描かれた図像などに見られる神話場面は、その神話におけるストーリーの流れの一瞬を写し取ったものであるといえる。すなわち、上記の議論をふまえるならば、それは当時語り継がれていた神話の中では、ある「トピック」、あるいは「エピソード」の一要素をとらえ

たものに過ぎない。

よって、前章で見たように、神話が語り継がれてゆくときに、その中の様々なレベルの要素の選択、順序付けが自由におこなわれ、再構成されてゆくとすれば、この「トピック」、あるいは「エピソード」の表現であるところの図像から、上位レベルの「神話」や「主題」を再構成してゆこうという努力は全く意味を持たないということになる。

古典期の多彩色土器に『ポボル・ヴフ』に出てくるような神話の場面が描かれているというM. D. コーの「発見」[Coe 1973: 12-14]以降、そういった古典期の図像の神話場면을説明する際に、よく『ポボル・ヴフ』の一場面をあげて、その場面に当てはめて解釈しようとするようなことが繰り返しておこなわれてきた。その中で明らかにされた土器の図柄として『ポボル・ヴフ』の双子の英雄に比定できるような人物や神の活躍が描かれているという事実により、小論で扱っている太陽と月の神話という「主題」が古典期にも語り継がれていて、その一場面がそこに描かれたということは間違いあるまい。しかし、上述したように、古典期に存在していた神話と『ポボル・ヴフ』との間には、例えば歴史的イベントや外部の影響など様々な要素が絡み合いながら、長い時間をかけて語り継がれてきたという事実があり、それ故にこれらは全く別の「神話」であると考えられなければならない。よって、こういった言説にしばしば見受けられる、土器などに描かれた神、あるいは人物に『ポボル・ヴフ』の登場人物名をあて、あたかも『ポボル・ヴフ』が古典期の低地マヤに存在していたかのような言い方をする説明は、まさにひとつの「エピソード」の表現から最上位レベルの「神話」について言及していることになりかねず、上記の理由から、適切な理解ではないといえる。この点については、慎重な記述をする姿勢を欠いては、読者の誤解につながるものでもあるということ、記述をする立場の者は十分認識する必要があるだろう。

それでは、今後、古典期の多彩色土器などに描かれた図像を実際に分析し、そこに見られる神話場면을理解してゆこうとするとき、我々にはどういった可能な手続きが残されているのであろうか。

まず、小論でおこなった様な『ポボル・ヴフ』以降の神話の分析を質量ともにさらに進め、古典期の図像との比較をするのためのデータをできる限り獲得することが大前提であることは言うまでもない。そして、描かれている神話場면을前にしたとき、それを「トピック」レベルを超えない範囲で理解することを目指さねばならないことも、これまでの議論から明らかである。

もちろん、先にも述べた、神話場面の中に書かれた文字の解釈によって、その場면을解釈するという方法や、描かれた複数の神話場面の様々な要素を丹念に比較、観察してゆくことで、その未知のストーリー上の前後関係を決定してゆくという、いわば考古学的な作業などを組み合わせることによって、「主題」レベルまでの再構成ができる可能性が全くないとはいえないかもしれない。しかしそれは、前章でみてきた神話を語り継ぐことの動態を考えると、土器の出土地、時期、そして可能であれば作者<sup>1)</sup>などで、かなり限定された条件付けをした上でしかおこない得ない作業であると考えている。よって、我々は「主題」レベルでは、その古典期の神話場面が、『ポボル・ヴフ』以降の神話の分析によって既知となっているいずれかの主題に属しているかどうかを推測し、判断するにとどめなければならない。

かといって、前章でみた神話の構成とその動態を考えると、「トピック」、および「エピソード」のレベルでも、ストーリーの再構成は非常に困難な作業であり、常に注意深くおこなわれるべきであるといえる。そして、このように神話場면을できるだけ非時間的な対象として見ようとするならば、この神話場面に登場する諸要素が、互いにどのような関係を持ちながら描かれているのかという図式をひろいあげることを最も重視するべきであるということは、「神話の構成単位が、

個々ばらばらの関係ではなく、諸関係の束」であり、「構成諸単位が意味機能を獲得するのは、このような束の結合という形においてのみである」[1972: 234] というレヴィ＝ストロースの言を待たずとも容易に理解できよう。またこの際、神話場面を描いた画面の左-右、上-下といった空間配置の持つ意味を考察することも有効な手段のひとつとなるであろう。この図式が後世の神話の分析から得られたデータと照らし合わされることで、古典期の神話の理解に近づくことができると筆者は考えている。その時、我々が目指さなければならないのは、古典期の神話を語るということではなく、あくまでここまで述べてきたように神話を理解することなのである。

## 7. 最後に

小論は、その理解は全く十分ではないものの、レヴィ＝ストロースの神話の構造分析に多くのヒントを得ている。人類学の分野では構造主義はもう過去のものであるという研究者は多い。しかし、小論のように古代の神話を理解しようとするとき、構造主義的な手法は未だ有効であると筆者は考える。レヴィ＝ストロースは、神話をオーケストラの総譜に例えて語っている。

管弦楽の総譜は、一つの軸に従って（ページからページ、左から右へ）、通時的に読まれるのみ意味を持つが、同時にまたいま一つの、上下の軸に従って、共時的に読まれなければ意味を持たない。換言すれば、同一垂線上に位置した全ての音符は一つの大構成単位、すなわち関係の束をなしているのである。[レヴィ＝ストロース 1972: 235]

我々がここで扱おうとしている土器ひとつひとつに描かれた神話の一場面の場合、ひとつの場面の中に時間的な経過が表現されているものもあるので、必ずしもそれをその土器が作られた当時に語り継がれていた神話の総譜の中の「同一垂線上に位置した全ての音符」に単純に比定することはできないであろうが、そこにはその神話に登場する要素同士の関係が表現されていることに相違ない。これまでに論じてきたように、先スペイン期の神話や、その主題をストーリーとして再構成することが極めて困難である以上、土器などの神話場面の理解を目指すにあたっては、レヴィ＝ストロースの言うところの非時間的・共時的な「関係の束」に注目してゆくことが、最も合理的かつ有意義に思われる。それゆえに、筆者としては、今後、構造主義の考えをさらに理解してゆく努力を続ける必要性を強く感じている。

発掘などによって偶然再発見されるまで土の中で眠っている考古遺物と異なり、神話は語り継がれることによって、古代から現在に至るまでずっと生き続けてきたものであるといえる。現代の先住民社会と同じように、先スペイン期でも、神話は人々の中にどっかと根を下ろし、彼らの日常生活に大きく影響していたのであろう。それゆえに、古典期マヤの神話を理解することは、古代マヤというものを考えてゆく中で、非常に重要な作業であるといえるのではないであろうか。しかし、これまでに見てきたように、古典期の神話の理解は後世の神話と古典期の図像との安易な照会によっては、決して成し遂げられるものではない。そのためには、我々にはまだまだ考えねばならないことがたくさん残っている。小論はそのための第一歩としての予備的考察なのである。

### 【謝辞】

本稿は1999年12月に京都外国語大学でおこなわれたラスアメリカス研究会において発表した内容に加筆修正をおこなったものである。出席者の方々には様々な立場から貴重なご意見を賜った。こ



ここに感謝の意を表したい。また本稿の執筆にあたっては総合研究大学院大学における指導教官である八杉佳穂先生の指導を賜った。師は1999年6月より在外研究のために米国に滞在されていたため、電子メールによるやりとりを余儀なくされたにもかかわらず、くりかえし細部にわたる厳しいご指導をいただいたことに深く感謝している。しかし言うまでもなく本論文の内容についてのすべての責任は筆者に期するものであることをここに明記しておきたい。

## 註

- 1) 『ポ波尔・ヴフ』は邦訳が出版されており、一般的によく知られたものとして、小論ではあえてその要約は掲載しないこととする。『ポ波尔・ヴフ』の邦訳としては林屋永吉によるレシーノス版の訳書[レシーノス 1972]が名高いが、小論ではこの文献に係るキチェ語の日本語表記は全てこの訳書に準拠して用いている。このタイトルは、元来、『ポ波尔・ウーフ (Popol Wuh または Popol Wuj)』と読むべきと考えられるが[八杉、私信]、小論では、これに関する議論はあえて別稿に譲ることにして、すでにこの表記が一般的に使用されている現状を鑑み、上記訳書に準拠して『ポ波尔・ヴフ』を用いることにする。
- 2) 『ポ波尔・ヴフ』を残したキチェの他、ケクチ、イシル、カンホバル、カクチケルなどは高地マヤと呼ばれ、小論で扱ったモパンの他、ユカテコ、ラカンドン、ツォツィル、チオルなどの低地マヤとは言語的、文化的に系統が異なる。実際、古典期のマヤの繁栄にはキチェは何ら関与していない。ブルースによるラカンドンの神話と『ポ波尔・ヴフ』との比較や小論におけるモパンの神話と『ポ波尔・ヴフ』との比較により、高地マヤから低地マヤにわたって広くマヤ地域と呼ばれる地域には共通する神話の要素が存在していることは明らかではあるが、今後分析を進め、古典期の神話を理解してゆこうとする場合には、この高地マヤと低地マヤの違い、そして両者の交渉にかかる歴史的経緯を十分に考慮していく必要があるといえる[Bruce 1979: 187-189; 八杉、私信]。
- 3) 上で示したように、神話とは、いわゆる神話的時間の中で起こった事柄によって世界の様々な事象の根拠を示すという機能を持つが、この神話的時間と歴史的時間を結び付けるものとして、自分たちの祖先についての語りというものがある。これには祖先がどこで生まれ、どのようにして自分たちの土地にやってきたのかという、いわゆる民族の起源についての物語という要素と、祖先から現在にいたる系譜を語る要素とがあり、これも世界中に広く見られるものである。マヤ地域では『ポ波尔・ヴフ』や『チラム・バラムの書』の他に、『カルキニ絵文書 (Códice Calkiní)』、『カクチケル年代記 (Anales de Cakchiqueles)』、『トトニカパンの首長の記 (Título de los Señores de Totonicapán)』、『シュパンツァイの歴史 (Las Historias de Xpantxay)』など、この種の伝承に入れてよいと思われるものは多数残っている。これらは先に述べた人間の創造といった神話世界から実際の歴史に結び付ける役割を持つという意味で、神話と歴史伝承の中間的な性格を持っているといえるが、小論における議論からははずすことにする。
- 4) 『ポ波尔・ヴフ』にはこれまでにいくつかの翻訳が出ており、ストーリーの流れは同じでも翻訳者によってその章立てが異なる。双子の英雄がシバルバに行くトピックを本文であげたように第2部としているのはレシーノス版[1950]で、他には、例えばエドモンソン版[1971]では第3の創造 (Third Creation)、テッドロック版[1985]では第3部となっている。
- 5) トンプソンがLord Kinと呼んでいるこの神話の主人公の名前を、小論ではキンと呼んでいる。これをトンプソンのインフォーマントがモパン語でどう呼んでいたのかについては不明である

が、このLord Kinという名前は、ユカテコ語で*K'inich Ahau*、すなわち「太陽の顔をもつ主」という古代マヤの太陽神の名前に相当するのは明らかである。

- 6) 『ポポル・ヴフ』でこの位置にあたるのは、イシュムカネー (Ixmucuné) とイシュピヤコック (Ixpiyacoc) という老神であろう。
- 7) 『ポポル・ヴフ』では双子の英雄がヴクブ・カキシユを退治するトピックはレシーノス版では第1部の後半に、エドモンソン版では第2の創造として、テッドロック版では第2部という形で書かれている。
- 8) 小論では取り上げていないが、モパンの神話ではこの太陽と月が空に昇るトピックに続いて、トウモロコシの発見の主題に属するトピックが語られている。
- 9) この部分は、エドモンソン版ではほぼ同じ訳があてられているが[1971: 180]、レシーノス版では「彼が生まれた時、自ら姿を現して、そのまま鏡のように(空に)留まった。古い言い伝えによると、この太陽は間違いなく今日我々が見ている太陽とは同じものではなかったということである。(筆者日本語訳)」と訳されている[1950: 188]。ちなみに、林屋永吉によるこのレシーノス版の邦訳では、「そしてそのうち、太陽は鏡のような形になっていった。歴史の伝えるところによれば、この太陽は今日我々が見ている太陽と、全く同じものではない、ということである。」という日本語になっている[1972: 165]。
- 10) 例えば、『ポポル・ヴフ』とモパンの神話に関して、第1表でおこなっているのは、太陽と月の神話という同じ「主題」の中で、「トピック」毎にまとめられた、各「エピソード」同士の比較ということになる。
- 11) 図像の作者に関する研究はすでになされている。その一例として、カー等は古典期後期の多彩色土器の詳細な観察から、それらの土器がいく人かの作者、あるいはいくつかの流派 (school) に属するものとして分類できることを明らかにし、実際に4つのグループについて分析をおこなっている[Kerr and Kerr 1988]。

## 文 献

Anderson, Arthur J. O. and Charles E. Dibble

1953 *Florentine Codex, Book 7 - The Sun, Moon, and Stars, and the Binding of the Years*, Monographs of The School of American Research, Number 14, Part VIII, The School of American Research and The University of Utah, Santa Fe, New Mexico

Bierhorst, John

1990 *The Mythology of Mexico and Central America*, William Morrow, New York

1992 *The Codex Chimalpopoca, History and Mythology of the Aztecs*, The University of Arizona Press, Tucson

Bruce, Robert D.

1979 The Popol Vuh and the Book of Chan K'in, *Estudios de Cultura Maya*, Vol. X, pp. 173-209

Coe, Michael D.

1973 *The Maya Scribe and His World*, The Grolier Club, New York

de la Garza, Mercedes

- 1987 Los mayas. Antiguas y nuevas palabras sobre el origen, in *Mitos cosmogónicos del México indígena*, Monjarás-Ruiz, Jesús, coordinador, pp. 15-86, Colección Biblioteca del INAH, Instituto Nacional de Antropología e Historia, México

Edmonson, Munro S.

- 1971 *The Book of Counsel: The Popol Vuh of the Quiche Maya of Guatemala*, Publication 35, Middle American Research Institute, Tulane University, New Orleans

Kerr, Barbara and Justin Kerr

- 1993 Some Observations on Maya Vase Painters, in *Maya Iconography*, Benson, Elizabeth P. and Gillett G. Griffin, eds., pp. 236-259, Princeton University Press, Princeton

レヴィ=ストロース、クロード

- 1972 『構造人類学』、荒川幾男他訳、みすず書房、東京  
1976 『野生の思考』、大橋保夫訳、みすず書房、東京

Makemson, Maud Worcester

- 1951 *The Book of the Jaguar Priest, a translation of the Book of Chilam Balam of Tizimin, with commentary*, Henry Schuman, New York

松村一男

- 1999 『神話学講義』、角川叢書 5、角川書店、東京

Montejo, Victor Dionisio and Lyle Campbell

- 1993 The Origin of Corn: A Jacalteco Tale in Comparative Mayan Perspective, *Latin American Indian Literatures Journal, A Review of American Indian Texts and Studies*, Vol. 9, No. 2, pp. 99-119

レシーノス、アドリアン（原訳校注）

- 1972 『ポポル・ヴフ、マヤ文明の古代文書』、林屋永吉訳、中央公論社、東京

Recinos, Adrián, Delia Goetz and Sylvanus G. Morley

- 1950 *Popol Vuh, The Sacred Book of the Ancient Quiché Maya*, The Civilization of the American Indian Series, Volume 29, The University of Oklahoma Press, Norman

Roys, Ralph L.

- 1967[1933] *The Book of Chilam Balam of Chumayel*, The University of Oklahoma Press, Norman

田村克己

- 1993 「神話・神話学」、『文化人類学事典』、pp. 392-393、弘文堂、東京

Taube, Karl

- 1993 *Aztec and Maya Myths, The Legendary Past*, published in cooperation with British Museum Press, University of Texas Press, Austin（『アステカ・マヤの神話』、藤田美砂子訳：丸善ブックス）

Tedlock, Dennis

- 1985 *Popol Vuh, The Definitive Edition of the Mayan Book of the Dawn of Life and the Glories of Gods and Kings*, Simon and Schuster, New York

Thompson, J. Eric S.

1930 *Ethnology of the Mayas of Southern and Central British Honduras*, Publication 274, Anthropological Series, Vol. XVII, No. 2, Field Museum of Natural History, Chicago

1970 *Maya History and Religion*, The University of Oklahoma Press, Norman

八杉佳穂

1994 「メソアメリカの神話」、『世界神話事典』、pp. 464-472、角川書店、東京

## APPENDIX

### サンアントニオの民話

(Thompson 1930, pp. 119-132)

#### 太陽と月と金星の伝説 (要約)

最初アダムとイブの息子が太陽であったが、あまりの暑さに洪水を起こして自らを冷やし、多くの人々がおぼれてしまう。そこでアダムとイブは両親を亡くし祖母とともに地上で暮らしている3人の子どもを指名し、そのうちの一人を代わりに太陽となる者とした。

そこで使者が遣わされ、3兄弟の次男にそのことを話し、少年はこれを受け入れた。しかしこの少年が太陽となる時はまだ来ていなかった。

この少年はキン (Lord Kin) といった。その兄はシュラブ (Lord Xulab) あるいはノホッチ・イチチ (Nohoch Ich) という名前でも後に金星に、弟はトゥプ (T'up) といひ後に火星か木星といった別の星になった。

3兄弟はいつも森で吹き矢を使って鳥を狩り、それを祖母のシュキツァ (Xkitza) に調理してもらっていたが、実は彼女はそれをこの3兄弟に与えず、毎晩彼女を訪ねてくる愛人の巨大な怪物 (バク?) に食べさせていたのであった。そのことを森の鳥から聞かされて知った兄弟は、次男のキンの知恵により、落とし穴にその怪物を落とすことで殺してしまう。そしてその怪物のペニスを魚と称して祖母に食べさせた。

前の晩に愛人が訪ねてこなかったことで不審に思った祖母は、兄弟に就寝させて、川に水浴びにいくというとって水瓶をもって家を出ていった。少年たちは恐ろしくなって眠ることができなかった。そこで大トカゲに祖母の様子を見に行かせることにした。トカゲが川岸に行くとき老婆が爪を研いでいた。彼女はイライラしていて水瓶をたたき割ると破片をトカゲめがけて投げつけ、それがトカゲの背中に刺さった。それ以来トカゲの背中にはせびれがあるのである。

トカゲから祖母が自分たちを殺そうとしていることを聞いた兄弟は、自分たちのハンモックにカーンテ (qaantise) と呼ばれる木のいすを、その頭の部分にひょうたんを置いて毛布をかぶせておき、彼ら自身があたかもそこに寝ているように見せておいた。そして自分たちは小屋のたる木の部分に隠れていた。やがて祖母がそっと小屋に入ってきて最初のハンモックに近付くとひょうたんにぶすぶすと爪を突き刺した。もし少年たちがそこに寝ていたら間違いなく殺されていただろう。

兄弟が祖母を殺してしまおうと決めるとき、末っ子のトップはいやがったので、上のふたりはまず彼を遠ざけることにした。彼らは鳥を狩りに吹き矢を持って森に行った。そして木のでっぺんに引掛かった獲物を登ってとってくるように末っ子に言った。その際、毛布を腰に巻き、その端を後ろでだらんと下げるようにさせた。末っ子が木のでっぺんに到達しようとしたとき、キンはかれに「ワック、ワック、ワック、ワック、ワック」と叫ぶように言った。これがクモザルの泣き声のはじまりである。末っ子は木から木へと飛び移り、腰に巻いた毛布は毛となり、そのたらんと垂れ下がった毛布の端は猿の尾に変化した。それまで世界には猿はいなかったが、末っ子が猿に変身してすべての猿の先祖となったのであった。

キンとシュラブは家に戻り、シュキツァにナヅ掛けの勝負を挑んだ。それは負けた方が殺されるというものであった。何度かの問答が続いた後キンは勝利し、弓矢によって老婆は殺される。

少年たちは祖母を埋めてしまったが、今度は彼らのために料理してくれる女性がいなくなってしまった。そこでキンは兄であるシュラブに、嫁を娶り、彼らのために料理をしてもらおうようにいった。シュラブは結婚をしぶったが、キンは近くにすむ老人の娘との婚礼をすすめてしまった。娘はシュラブと一緒に住むようになったが、シュラブが一日中動物の世話のために外にいて、夜にしか家に帰ってこないため、彼女は夫の顔を全く見るができなかった。シュラブは世界中の動物の主で、これらすべての動物を囲いの中で飼っていた。そしてミルパをつくり動物たちのためにとうもろこしを栽培した。

シュラブがいつも離れているので、妻は不満に思った。ある日兄弟が外出しているあいだにひとりの男が訪ねてきて、妻はその男といい仲になってしまう。そして妻は男から自分の夫の顔が非常に醜いことを聞かされる。その夜シュラブが食事をとっていると、妻は松明を灯し夫の顔を見てみた。男が言ったとおりの顎ひげのある夫の顔はなんと醜いことであつたか。思わず妻は笑ってしまったため、シュラブはびっくりして飛び上がってしまった。これに驚いた動物たちは一斉に囲いを壊して四方に散って行った。シュラブは慌ててこれを捕まえようとしたができなかった。彼はシカやウサギやイノシシの尾を掴んだが、尾がちぎれてそれらは逃げて行ってしまった。今日これらの動物のしっぽが無かったり短かかったりするのそんな理由からである。シュラブは怒って家を出て行ってしまった。

彼はマム (Mam)、又の名をウィツ・ホック (Huitz-Hok) という大地の神々を呼び、彼の動物や植物の面倒を見るように言った。「人々はもう動物をおとなしく飼っていることはできないのだ。しかし、彼らが私の法にしたがうならば、私は食べるための肉もとうもろこしもその他の植物も与えてやるだろう。その法とは、彼らが狩りをしたいときには、夜中一睡もせずには、夜明け前には私にコパルを焚いて動物を乞うことである。それは私が家において地平線の上に高くあがる前に行われなければならないが、今はマムに対して行えばよい。マムは私のかわりに私の仕事をしてきているので、彼らが動物たちを囲いから逃がし、狩りが容易にできる森にそれらを放しておくであろう。私の法に従わぬものは、迷子になったわずかな動物の他には獲物を得ることはできないし、そのミルパの収穫は低く、捕る魚も小さいであろう。」

シュラブの手は動物のちぎれた尾から出た血でぬれていた。彼はそれを *st'sayuk* と *st'sai* という 2 種類の植物で拭いたが、それらは食べられるようになり、その木からは食べられるキノコも生えるようになった。こうしてシュラブは人々に多くの食べ物を与えた。そして彼は旅に出て行ったのであるが、まだ彼が明けの明星となる時は来ていなかった。

その頃、キンは遠くを旅していた。やがて彼はついに母親の家にたどり着いた。母親はキンを生んだとき結婚しておらず、彼女の父親の逆鱗に触れることを恐れて川のそばに彼を箱に収めて隠したのであった。そしてそこで彼は例の殺されたシュキツァに見つけられたのである。母親はキンは自分の息子であることに気づかなかったが、キンはこのことを知っていた。彼女には別に息子がおり、夫が居ないのでキンと一緒に住んで欲しいと言った。キンはこの申し出に対して怒り、恥知らずな女とののしって、自分が彼女の息子であることを告げた。母親は彼に許しを乞い、改めて一緒に住んでくれるように頼んだが、キンはこれを断り、再び旅に出ていった。

しばらくして彼はタクタニ (T'actani) という老人の住む家にやってきた。この老人は美しいシュタクタニ (X'tactani) という少女と一緒に住んでいた。彼女は糸紡ぎと織物のとても上手な女性であった。キンはこの少女と結婚することに決めたが、事を運んでくれる適当な人物がいなかったため自らの力で彼女を獲得せざるを得なかった。彼は毎日狩りに出かけたが獲物は少なく、自分が優れた狩人であることを少女にわからせるために鹿の皮に灰や干し草や木の葉などを詰めて、毎日夕方になると少女の家の前を通った。これを見た少女は彼のことを気に入り結婚を考慮するのであったが、その祖父は彼が少女を騙していることを見破り、少女に彼の通る路に水をまいておくように言う。キンはこの水に足を滑らせ転んでしまい、鹿の皮の中の物が飛び出して彼のウソがばれてしまう。

キンはとても恥をかいたが、彼女のことはあきらめなかった。彼はハチドリのように身体をかりて、シュタクタニの家に忍び込んだ。散らばった灰や枯れ草からはたばこの木が生えてきて、ハチドリになったキンは蜜を吸いながら花から花へと飛び回った。彼女はそれを見てタクタニに吹き矢を使って捕まえてもらい、13ある部屋の一番奥にある自分の部屋に連れて行った。

そのハチドリがキンであることがわかって、二人は一緒にタクタニのもとから逃げることにした。駆け落ちするにあたって、二人はタクタニが持っている世界中で起こっているすべてのことを見通すことができるという魔法の石 (sastun) の表面を煤で覆い、どれだけ離れていようと命中させることのできるという魔法の吹き矢に粉にした唐辛子を詰めて口のところをふさいでおいた。

翌朝シュタクタニがいないことに気付いたタクタニは魔法の石で彼女がどこにいるか探すことにした。魔法の石には煤が塗られており何も見えなかったが、わずかにキンは煤を塗り残した部分があり、そこから孫娘がキンと一緒にカヌーに乗っているのが見えた。そこで彼等を連れ戻そうと魔法の吹き矢を伸ばして、唇をつけ、力一杯息を吸い込んだ。次の瞬間中につまっていた唐辛子が彼の口や喉にいっぱいになり、呼吸ができなくなってしまった。どうにか立ち直ったタクタニは怒り心頭、二人を殺すことにした。

タクタニは叔父である雷神のチャク (Chac) に、その稲妻で二人を殺してくれるように頼んだ。チャクは最初それには反対したが、タクタニの剣幕に押されて結局引き受けてしまい、黒い衣装を着て太鼓と斧を持って出ていった。キンはチャクが近づいてくことに気づいたが、カヌーにはチャクの攻撃を防げるようなものはなかった。そこで、キンは亀に、シュタクタニは蟹に変身して水の底に向かって全速力で泳いだ。稲妻が落ちてきたとき、蟹は泳ぎが遅かったので逃げ切れずこれに当たってしまい、シュタクタニは殺されてしまう。キンは彼女の破片をトンボに集めさせ、それらを13の中空の丸太に納め、13日したら戻ってくると言い残して、近くに住む老婆に託して出かけていった。

13日後にキンが帰ってくると、13の器はブンブンギーギーとうるさい音を立てていて、老婆はうるさくて眠れやしないとキンに文句を言った。彼は器のふたを開け始めたが、1番目から12番目ま

での器にはヘビや蚊やハエや蜂や毛虫ばかりが入っていて、13番目の器に愛するシュタクタニが入っていた。キンはある男に最初の12個の器を海に捨ててくるように言ったが、この男は中から聞こえてくる不思議な音が気になって、途中で1つずつふたを開けてしまう。そうしたら中からヘビや虫たちがうじゃうじゃと出てきて世界中に広がっていった。それまでは世界にはこのような害虫は存在していなかったのであった。

シュタクタニが生き返ったとき、彼女にはヴァギナがなかった。キンは13の器を預かっていた老婆のアドバイスで、シカに彼女の股間を踏ませることでヴァギナを作り、彼女と性交をした。それはとてもすばらしかったので、彼はこの喜びによって人々は自らを墮落させてしまうだろうと考え、ネズミに彼女のヴァギナに小便をかけさせた。それ以来、性の喜びの後には不快感が伴うのである。

キンはシュタクタニは新たに家建て、兄のシュラブも一緒に暮らすようになった。しばらくすると、キンは妻が彼にうそをついていて、兄と関係を結んでいるのではないかと疑うようになった。彼は嫉妬と怒りで二人をこらしめてやろうと決めた。彼は七面鳥とニワトリの胆汁にトウガラシとアマツトという赤い染料を混ぜて作ったタマルを二人に食べさせた。彼らは最初の一口でほとんど息ができず死にそうになり、涙が出て、食べたものをはいてしまった。家にある水を全て飲んでしまったので、シュタクタニは水瓶を持って川におりていった。

シュタクタニが川辺で悔しさと惨めさですすり泣いていたとき、一羽のワシが舞い降りてきた。彼女はこのワシに連れられて、大鳥の主と共に暮らすためにワシの町に行く。大鳥の主は4つの目と4つの角を持つ大きな悪魔とも呼ばれており、鳥の糞でできた真っ白い家に住んでいた。

キンは妻がワシに連れ去られたことを察知し、シカの姿を借り、川岸に横たわって妻を連れ去ったワシが彼を食べに来たところを捕まえ、妻のいるワシの町に連れてゆかせる。

町に近づくと彼は地上に降ろさせて、二人の男がこの町に運び込もうとしている薪の中に隠れ、町の手前で外に飛び出し、町に入る。そして大鳥の主の家に行き、泊めてくれるよう頼んだ。

キンは主の家に行くと7つの赤いトウモロコシの粒と太鼓と笛を使って、主に歯痛を起こさせた。だんだんと痛みは増してゆき、主はキんに歯痛を治してくれるように頼む。そして、主の部屋に入ることを許されたキンは、そこで自分の妻を見つける。主がしばらく眠り込んでいる間に、キンは妻を何とか説き伏せて、二人はこのワシの町から逃れ、もとの川の畔に帰ってくる。

そして、ついにキンは太陽として空に上る時が来たのである。彼の兄弟たちや妻とともに空に上った。兄は明けの明星に、弟は宵の明星になった。そして妻のシュタクタニは月になった。キンは空の真ん中に鏡を置き、毎朝東にある家から空の真ん中を目指して出発した。そしてその後、家に引き返した。しかし、鏡が彼の光を反射したので、あたかも彼が旅を続けているように見えた。彼が帰宅すると、今度はシュタクタニが月として同じやり方で空を横切った。その頃、彼女は夫と同じくらい明るかった。そのため世界には闇というものはなく、夜は昼と同じくらい明るかった。そのおかげで昼も夜も働かなければならない人々を上から眺めてシュタクタニは悲しくなった。そこで、キンは彼女の片目を取り、明るさを少なくした。それ以来、人々は夜の間に労働から解放され眠ることができるようになったのだ。

## Myth of Sun and Moon: Preliminary Consideration for Understanding Classic Maya Myth

Shigeki Shakuya

(The Graduate University for Advanced Studies)

Key Words: Maya, Myth of sun and moon, Mopan, Popol Vuh, Transmitting myth

It is well known that the modern maya communities maintain varieties of myth and that a lot of elements of these have been transmitted from precolumbian time. The oldest of these myths that we know so far is *Popol Vuh*, the old Quiche myth which was said to be written down in the sixteenth century. So when we consider about unknown story of prehispanic maya myth, we have to imagine it fragmentarily from images or letters described on monuments, ceramics, cedices, etc. that remain today.

The author's aim is to understand old maya myth that existed in the Classic period, more than a thousand years ago, by comparing with those that have been transmitted until today in Mesoamerica. For this attempt we must consider first about an issue of transmitting myth for a long time, from the Classic period up to now. This article deals with this issue comparing two myths of sun and moon, that is to say, one is Mopan myth of sun and moon collected in San Antonio village by J. Eric S. Thompson in the last half of 1920's and the other is the Hero Twin story of *Popol Vuh* which we read here as the myth of sun and moon.

Mopan myth of sun and moon is composed of six topics, and we see these topics are comparable to those of *Popol Vuh* in many episodes. The first topic is on the reason for the creation of new sun that describes alternation of sun which corresponds to Vucub Caquix scene in *Popol Vuh* in which new real sun (one of Hero twin) takes place of false sun (Vucub Caquix).

The second topic is on the battle of the sun and his brother against their grandmother, and similar story can also be seen in the old Quiche myth. In both myth, the sun and his brother finally defeat their grandmother, and within this battle they also change their brother who opposes to them into monkey.

The third one is on the courtship of sun and moon, which is followed by the fourth topic on the death of moon and her revival. These two topics are comparable to the episodes of journey to Xibalba in *Popol Vuh*. In both cases, the protagonists stand up to absolutely powerful opponents by using their wisdom, and once they are defeated to die or disappear, but soon they revive in or around the river.

Next topic is on the story that the moon runs away and the sun brings her back home. Here the rival of Lord Kin (sun) is the chief of vultures with absolute authority, so this topic is also comparable to Vucub Caquix scene in *Popol Vuh* again. In both cases, the heroes cause toothache of the strong rival vultures by magic of maize in Mopan myth or by blowgun shoot in *Popol Vuh*, and approach to the opponents to carry out their purpose to bring his wife back in case of Mopan myth and to defeat the rival in *Popol Vuh*.

The last topic is on the ascension to the sky of sun, moon and venus. This topic sheds light on the thought that the sun that shows itself is not a real one and it is just his reflection in (a mirror placed in the center of) the



sky, which may be thought to be a universal concept within maya region, and needless to say that we can see this also in the old Quiche myth.

This analysis above indicates us that, between two maya myths of different time and place, there are many elements common to each other, that means these elements have transmitted unchanged in the maya region from *Popol Vuh* time up to now . On the other hand we can also see here the dynamism of transmitting myth. The "myth" is composed of one or some "subjects", which consist of one or some "topics", and in lower level there are "episodes" of which C. Lévi-Strauss terms "mythème". When a myth is transmitted, this can be reconstructed choosing these elements in each level without restraint and putting them in appropriate order, as "bricolage" termed by Lévi-Strauss.

When we attempt to understand Classic maya myth from the mythical scene painted on polychrome vase or so, we have to mind that this scene is of a element of "topic" or "episode" level. So, considering the dynamism of transmitting myth mentioned above, there is no sense in making efforts to reconstructing "myth" or "subject" from lower level "topic" or "episode" . We often come across a explanation that gives us the impression as if *Popol Vuh* were existed in the Classic period, putting the name of the characters of the old Quiche myth to those painted on Classic vases. Now we know that this type of discourse is inappropriate because it may cause misunderstanding to the readers. The Classic myth and *Popol Vuh* should be treated as different myth.

Based on the discussion above, for understanding Classic maya myth, we should attach a great deal of importance to observe what relation the characters of the mythical scene on the Classic vases are depicted to have with each other.